

## DOHaD を臨床に生かすための課題

中野 有也

昭和大学医学部小児科学講座

DOHaD 学説は、いまだ臨床医の中で十分な市民権を得られていないというのが私の実感である。臨床医が DOHaD に大きな興味をもちにくい理由は、「DOHaD を臨床に生かすためにはどうしたらよいか」という視点が、現在の DOHaD 研究には不足しているからであろう。また、DOHaD 研究を理解するためには、疫学的調査の解釈、遺伝や動物実験など、臨床医にとってはおおよそ馴染みのうすい分野の知識が必要であることも、DOHaD 不人気の理由のひとつなのかもしれない。疾病予防の重要性、早産低出生体重児の最近の救命率の向上などを考えれば、DOHaD が掲げる「先制医療」実現の社会的意義は計り知れない。「先制医療」とは病気になる人を待つ、これまでの医療とは全く異なった医療の形であり、今後私たちが進むべき道のひとつであると私は確信している。

DOHaD 研究の守備範囲は非常に広く、多くの小児科医、産婦人科医、内科医が無関係ではいられない。早産低出生体重児に対する栄養管理や成育環境の制御に始まり、肥満、糖尿病、低身長などの内分泌的な問題、慢性腎臓病、高血圧、慢性呼吸器疾患、アレルギー疾患、Microbiota (腸内細菌叢の重要性) に加え、発達遅滞や発達障害、統合失調症などの精神・神経疾患も、DOHaD との関連が指摘されている分野である。DOHaD は NICU や産科施設で働く看護師や助産師にも知ってもらいたい概念である。早産低出生体重児の NICU での理想的な成育環境を追い求めるという考え方は、まさにディベロップメンタルケアに通ずるところがあるし、DOHaD の視点から母乳研究に取り組む流れももっと必要と思う。

本教育講演では、DOHaD 初心者にも興味をもっていただけるように、まずは DOHaD の概念、DOHaD 研究の歴史について要点を確認したうえで、臨床に使えるような DOHaD 研究を紹介したいと思う。また、実際の症例を提示しながら、発育不全のあった児における理想的な遠隔期の栄養管理や成長についても考えたい皆さまにとって、この講演が DOHaD に興味を持つきっかけとなればと思う。また、DOHaD 研究の現状や今後の方向性を考える機会となれば演者にとっては望外の喜びである。